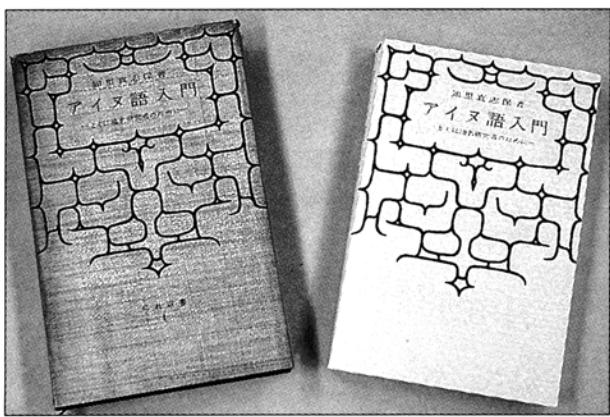


【フィールドからデスクから】

入門書紹介—知里真志保『アイヌ語入門』 (榆書房、1956年)

通常の語学の入門書をイメージしてこの本を手にとった人は、恐らくとまどってしまうのではないかでしょうか。なぜなら、「〇〇語の入門書」といえば、普通は一歩一歩知識を積み重ねて行く方式で書かれているのですが、この本はとすると、随所に漫談あり、諷刺あり、といった具合で、大分勝手が違います。ですから、英語を勉強する時のように、純粹に語学としてアイヌ語の基礎をマスターしたい人には確かにあまりお勧めできる本ではないかもしれません。しかし、それでは、この本は単なる軽い読み物なのか、とすると、事実は全くその逆で、それどころか内容的には一種の高度な学術書である、というところが、この本(及び著者)の一筋縄では行かないところで、そして、それがまた、一種の魅力ともなっているわけです。つまり、この本は、一見、親しみやすい、軽い口調で書かれているために、その真価がわかりにくいのですが、実はアイヌ語の最も基本的な特徴に関わる指摘を含む、アイヌ語研究史上、画期的な意義を持つ、大変重要な本なのです。



『アイヌ語入門』(左:初版 右:復刻版)

従来、知里博士の『アイヌ語入門』といえば、他の研究者への手厳しい批判に満ちている、ということでもしろ有名でした。その批判の激烈さは、読者はおそらく読めても、指摘を受けた当人はたまらないだろう、と思わせられる物凄さです。しかし、それらの批判は、先人の努力に対して少し酷ではないか、という面もあるにはあるのですが、良く読んでみると一つ一つがしっかりした学問的な根拠のあるものばかりで、単なる誹謗、中傷の類ではない、ということに注意する必要があります。しかも、このような批判をあえて行った意図を、知里博士ご自身が「あとがき」の一番最後に、明解に述べておられます(ちなみに、この文章は、学問研究というものがどういうものであるべきかを説いたものとしては、他に例をみない名文です)。しかしながら、一般には、その戦闘的な激しい批判のほうがとく注目を集め、この本の持つ学術的な重要性のほうは、必ずしも十分理解されていないように見えるのは、大変残念なことです。そこで、ここでは、学問的に重要な点にしづつ、その内容を簡単にご紹介したいと思います。

* * *

『アイヌ語入門』で述べられている最も重要な知見の一つは、アイヌ語は自動詞と他動詞の区別を明確に行う、という指摘です。自動詞と他動詞が異なる活用を行うという事実は、既に金田一京助博士によって発見されていましたが、知里博士は、それを一步進めて、句や文の構造にもその特徴が現れることを初めて明確に指摘したのです。

例をあげれば、知里博士によると、日本語では「鹿が下る沢」と言うことができますが、アイヌ語でこれを直訳して *yuk san nay* (*yuk*「鹿」, *san*「下る」, *nay*「沢」) としても正しいアイヌ語にはなりません。では、どういう表現が適格かと言うと、*yuk osan nay* としなければなりません。*osan* は「～に下る」という意味の、場所を意味する目的語を取る他動詞です。つまり、

主語しか取れない自動詞 (san 「～が下る」) では目的語が取れることになり、このままでは nay 「沢」の文法的な資格が宙に浮いてしまいます。ですから、自動詞 san ではなくて、目的語を取れる他動詞 osan 「～が～に下る」を用いなければならない、というわけです。このことは、アイヌ語では、動詞がいくつの名詞を必須の要素として要求するのか、ということが文法的に決定的に重要な意味を持っている、ということを意味します。このような動詞の性質は、言語学の用語では「動詞価」と呼ばれており、現代の言語学においても重要な問題の一つです。また、「鹿が沢に下る」から「鹿が下る沢」を作り出せるかどうか、という問題は、どのような名詞が被修飾要素になれるのか、という問題であり、これは現代の用語で言えば「関係節化における接近可能性の問題」と言うことになります。やはりこの問題も、現在、多くの言語について盛んに研究されています。もちろん、その後、知里博士の指摘に対する修正、発展はあるわけですが、このような、今日でも重要な言語学的問題を、今から半世紀も前に、アイヌ語地名を例として、一般にもわかりやすく、明解に解説しているのは、考えてみると驚くべきことです。

* * *

知里博士は『アイヌ語入門』の出版の後、比較的早くに亡くなられ、これらの問題について自説を学術論文の形で展開されることはありませんでした。しかし、その先駆性において、アイヌ語研究史上における『アイヌ語入門』の学術的価値は不滅のものです。なお、本書は『知里真志保著作集』第4巻（平凡社）に収められており、また、北海道出版企画センターから復刻が出ています。

(非常勤研究職員 佐藤知己)

【研究課題紹介】

「「ピリカ会」関係資料の調査研究」について

「ピリカ会」とは、1909（明治42）年に、渡島地方の森村（現森町）で医者をつとめていた村岡格（1850～1923）が、アイヌ文化の調査・研究を目的に掲げて設立した団体です。村岡格は松前藩の藩医の家に生まれ、早くからアイヌ文化に関心を持ち、落部（現八雲町）のコタンの弁開廻次郎（1847～1919）らと交友を持っていました。

この村岡家の資料が、現在、遺族や関係者の方々によって森町教育委員会に寄贈され「村岡文庫」として保存されています。その中には、「ピリカ会」に関する文書や書簡が多数含まれています。また、村岡が落部等で収集したアイヌの民具が、松前町教育委員会に保存されています。

当センターでは、これらの「ピリカ会」関係資料について、1999（平成11）年度から5ヵ年の計画のもと、森町ほか関係町村の教育委員会の協力を得ながら、資料の収集と内容の解読・検討等を進めてきました。

* * *

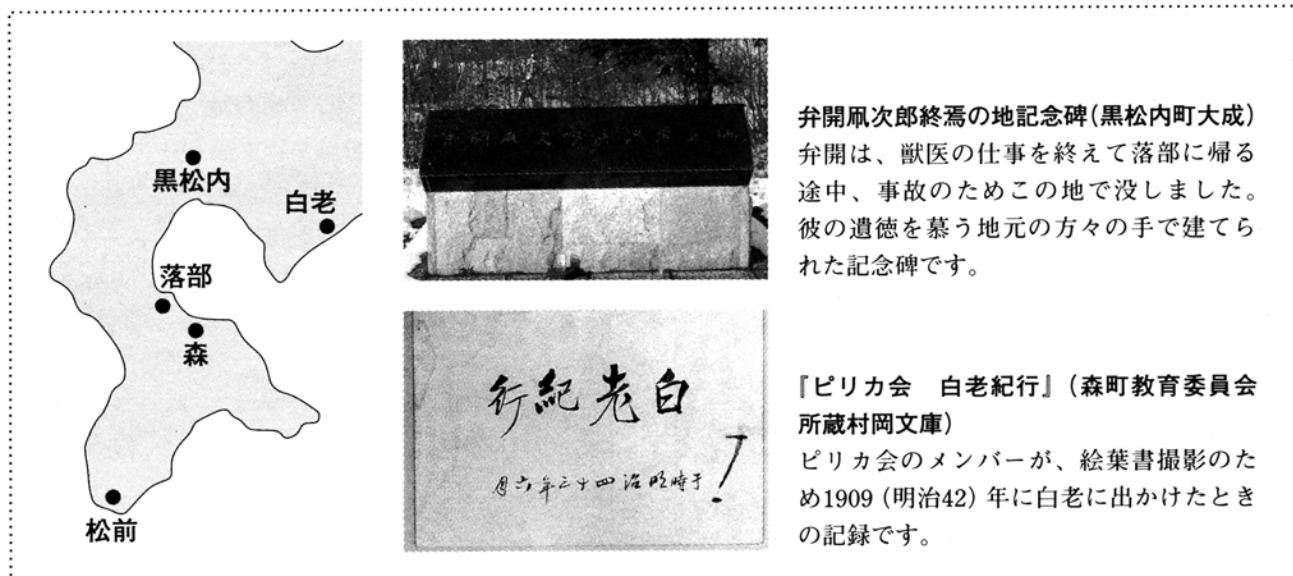
近代のアイヌの歴史や文化を直接に物語る資料のほとんどは、胆振、日高、十勝、釧路、旭川…といった地域のもので、道南の渡島・檜山地域については、特にここ百年の歴史に関する記録や、この地域の人々が作ったとされる民具等は、今までのところ確認されたものはごく僅かです。そのような中にあって、「ピリカ会」の関係資料は、この時代の森や落部地域のアイヌ文化に関する資料を含む点で貴重なものです。また、同会の活動は、アイヌ文化の保存や調査を掲げた団体の事例として、重要な意味を持つのではないかと思います。このほか、弁開廻次郎については、陸軍の八甲田山雪中行軍遭難事件（1902年）に際してアイヌによる捜索隊を率いて救援活動に参加したり、日露戦争（1904～05年）

の開戦前後には、アイヌの部隊を率いて軍隊に参加することを願い出た記録などが残っています。そして、弁開のこのような行動には村岡が介在していたことが多いようです。また、弁開は獣医として遠くは現在の黒松内町内までを廻り、当時の開拓農民の家畜を見たと言われています。「ピリカ会」関係資料の調査は、こうした弁開のような先人の足跡を考えることにもつながる課題だと思います。

* * *

調査研究の作業は、「村岡文庫」の中の関係文書の内容点検を中心に、落部にある弁開凧次郎の関係資料や松前町にある民具資料の撮影と計測等を進めてきました。

残念ながら、「ピリカ会」の活動そのものに関する直接の資料(会員名簿や実質的な活動期間を示す記録など)はあまり確認できていませんが、「村岡文庫」の中には、「ピリカ会」による「アイヌ風俗絵葉書」の作成記録、同会と坪井正五郎(人類学者:1863~1913)、吉田巖(アイヌ文化研究者・小学校教員:1882~1963)らがやりとりした書簡のほか、同会の白老紀行の報告文等、貴重な資料が含まれています。また、松前町教育委員会が所蔵する民具は、点数の多さもさることながら、収集地も比較的明確なものが多く、かつ日高など他の地域の民具には見られない特徴を持つものがあることも確認できました。



さらには、村岡や弁開の足跡や交友関係をたどって、帶広市図書館の吉田巖資料に含まれている弁開や村岡の書簡を調べ、八雲町や黒松内町に残されている弁開らの記録や記念碑を探し、青森市等で八甲田山遭難事件の関係資料等を収集し……と調査の範囲も広がっていきました。

* * *

この研究課題は、本年度（2003年度）が最終年度に当たります。おりしも、南山大学の小谷凱宣教授が、海外のアイヌ民族資料の調査を進める中で、「ピリカ会」創立の年に森を訪れたことのあるアメリカの人類学者フレデリック・スター（1858～1933）の記録を確認し整理を進めておられることから、来る10月24日（金）に、森町において森町教育委員会との共催による「アイヌ文化講座」を開催し、小谷教授による講演とともに、当センターによる調査研究の成果の一端を報告いたします。また、この研究課題の成果については、次年度に報告書としてとりまとめる予定です。

(アイヌ文化講座の詳細については、6ページをご覧ください)

(研究課長 古原敏弘／研究職員 小川正人)

弁開凧次郎終焉の地記念碑(黒松内町大成)
弁開は、獣医の仕事を終えて落部に帰る途中、事故のためこの地で没しました。
彼の遺徳を慕う地元の方々の手で建てられた記念碑です。

『ピリカ会 白老紀行』(森町教育委員会
所蔵村岡文庫)
ピリカ会のメンバーが、絵葉書撮影のため1909(明治42)年に白老に出かけたときの記録です。

【こんなときは】

クマが登場する物語を知りたい

アイヌの口頭文芸のうち、クマやキツネが登場する物語を知りたいという問合せが比較的多く寄せられています。その他にも、シマフクロウ、シャチ、テン、オオジシギ、ハスカップなどがありました。また、「アイヌラックル」や「コロポックル」などの神が登場する物語にはどんなものがあるか、火山や洪水といった自然現象についてはどのように語られているか、などという質問もいただきました。

人間の生活に関わりの深いこれらは、一つの物語の中で主人公やわき役として様々ななかたちで登場するので、その物語が展開する上で大きく関わっているものを中心にお答えしています。なぜなら、一口にキツネといっても、物語によっては、人間に害をなしたり役に立ったりすることがあるので、どれか一つの代表的なものを選ぶのは困難です。その動物が登場する物語にはどのようなものがあるのかを知るためにには、より多くのパターンの物語をなるべく網羅的に調べることのできる資料が必要となります。

* * *

このような場合、レファレンスの担当者がよく利用する文献は、稻田浩二・小澤俊夫（編）『日本昔話通観 第1巻 北海道（アイヌ民族）』（同朋舎、1989年）です。これは、日本各地で伝承された物語を収録したシリーズ全29巻の一つであり、サハリンと北海道のアイヌが伝承した593編の話型とその類話を掲載しています。

それぞれの物語は、大きく「むかし語り」「笑い話」「動物昔話」の三つに分類され、アイヌ語原文から日本語に訳されたものがそのままあるいは要約して配列されています。この本は、直接アイヌ語学習に用いたり、アイヌ語原文を愉しみだりするためのものではなく、様々な物語をモチーフや話型によって比較研究するための手がかりとなるように配慮して編集されたも

のです。本文に収録した物語には、それぞれの出典となった文献の名称、その物語の伝承地、伝承者に関する情報が記されています。巻末には、日本昔話との対応関係などについて記した「解説」や刊行年次順に原典を一覧できる「資料目録」が付いていることなどが特徴です。



『日本昔話通観 第1巻 北海道（アイヌ民族）』

物語の表題には動植物や自然現象の名称が含まれるものが多いので、目次を利用して探すことも可能ですが、巻末の索引を使う方が便利です。索引は四通りありますが、「神名と動・植物名索引」を利用します。それ以外の索引で動植物の名前を引くことはできません。

たとえば、クマが登場する物語について知りたい場合、この索引の「くま 熊」の項目を引きます。すると、69話のクマの物語が載っているページが記してあります。また、この項目のすぐ下にある「穴熊の神」「大熊」「熊の神〔キムン・カムイ〕」「子熊」などの項目でも30話以上の物語を見つけることができます。項目の最後尾に「山の神」も見よという意味の矢印があり、ここにもクマの物語が記されています。これは「キムン・カムイ」が「山の・神」という意味を持つからです。しかし、この項目には必ずしもクマだけでなく、「大地の神」などの物語も含まれているので、日本語の索引項目が指示するものが何であるか、ということを常に意識しておく必要があります。

このように様々な物語の原典を見つけることができるので大変便利な本です。しかし、この本の索引には、正確な日本語に訳されていない原典から引用されている場合があり、かねてから「伝承資料はできるだけアイヌ語原文にあたること」※と利用に当たっての注意点が指摘されています。特定の動植物や自然現象に関わる物語を調べる際は、この本を道しるべとして原典にたどり着き、その中のアイヌ語と引用された日本語訳に誤りがないかどうか、また要約された時点で大事な情報が抜け落ちていないかを吟味するといった姿勢が大切です。

* * *

その他に、この本に掲載されていない物語があることに留意する必要があります。特にこの本の刊行後に、多くの物語が出版されており、萱野茂『カムイユカラと昔話』(小学館、1988年、51編)、中川裕(校訂)・大塚一美(編訳)『キナラブック 口伝 アイヌ民話全集』(北海道出版企画センター、1990年、29編)、萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成』全10巻(ピクターエンタテインメント、1998年、40編と歌謡多数)などの他、北海道教育委員会のアイヌ文化関連の報告書などにも目配りして本書の情報を補うことが大切です。なお、当センターのアイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ6 ウエネウサラ 口頭文芸』(2000年)でも、これらの参考文献の主なものを紹介しています。

現在、この本は一般の書店で入手するのは困難ですので、図書館へお問合せください。

(研究職員 大谷洋一)

※米田(本田) 優子「アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点—穀物の起源説話に関する検討を中心に—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第1号(1995年)

研究センターのホームページが変わりました

研究センターのインターネットホームページを開設して3年目になります。紹介する情報を一層充実させ、より見やすく操作しやすくするため、8月18日付で大幅に更新しました。

・画面のデザイン等を変更しました

センター事業の全体が視野に入るようになり、どの画面でもなるべく少ない操作で閲覧できるようにしました。

・掲載する情報を増やしました

多くの情報を提供してほしいという要望、意見を踏まえ、情報量を増やしました。一例として、これまでアイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』についてはシリーズの一部しか掲載していなかったのですが、刊行した8冊全てを閲覧できるようにしました。

新しくなったホームページを、多くの方々が利用してくださるようお待ちしています。



センター刊行物のお知らせ

今年度9月30日に次の刊行物を発行しました。

●『アイヌ民族文化研究センターだより』第19号

●『山田秀三文庫 文書資料目録Ⅲ・写真資料目録』

このうち『山田秀三文庫 文書資料目録Ⅲ・写真資料目録』は、主に道内外の大学、博物館、図書館、アイヌ文化関係機関などに配布するほか、北海道行政情報センター（北海道庁別館3F／電話011-231-4111内線22-389または011-241-7979）で有償頒布します。

当センターは「アイヌの音楽にふれてみよう」をテーマに、ムックリ（アイヌの口琴）の鳴らし方を指導したり、アイヌの楽器について説明したパネルを展示しました。



当センターの展示コーナー



ムックリの演奏指導

行事

●「アイヌ文化講座」のお知らせ

センターの普及事業の一環として、毎年「アイヌ文化講座」を開催しています。今年度は森町教育委員会と共に、海外にあるアイヌ資料の調査を長年進めている小谷凱宣氏に講演していただく他、当センターによる調査研究の報告も行う予定です。

なお、参加費は無料です。

テーマ：百年前の森のアイヌ文化

～ピリカ会とF.スターの資料をとおして～

講師：小谷凱宣氏（南山大学人文学部教授）他

日時：平成15年10月24日（金）

13：30～16：30（13：00開場）

会場：森町公民館（森町御幸町132）

問い合わせ：アイヌ民族文化研究センター

011-272-8801

森町教育委員会

01374-2-2186

●「2003道立試験研究機関おもしろ祭り」参加

毎年、道立の試験研究機関が推進している研究の内容やその役割を広く道民に知っていただくため、道立試験研究機関「おもしろ祭り」を開催しています。今年は8月5日に小樽市の「ウイングベイ小樽五番街ネイチャーチャンバー」で開催しました。

平成15年度前半の主な動き

前年度末

・谷本一之所長退任（3月31日付）

6月

・杉本堅治所長就任（6月1日付）

7月

・第5回薬用植物に関するワークショップ
(名寄市／参加：貝澤)

・平成15年度第1回運営協議会

（会議記録は当センターで閲覧できます）

8月

・「2003道立試験研究機関おもしろ祭り」（小樽市）

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel.011-272-8801(代) Fax.011-272-8850

開館／月～金 9:00～17:00 休館／土・日・祝日

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>



古紙配合率100%、白色度70%の再生紙を使用しています。